

## 祥瑞の等級に関する一考察

——『統日本紀』和銅三年秋七月丙辰条を巡って——

香川 郁子

はじめに

『統日本紀』和銅三年秋七月丙辰条に<sup>(1)</sup>

左大臣舍人正八位下牟佐村主相摸・辰。文武百官因奏賀辭。賜祿各有差。京裏百姓。戸給穀一斛。相摸進二位二階。賜純一十疋。布廿端。

という記事がある。この「辰」の字の解釈を巡っては、新訂増補国史大系本の「瓜」とみなす説と、「増補六国史」の内の『統日本紀』・「新日本古典文学大系」の内の『統日本紀』との「依」とみなす説の二説が存在する。

前者「瓜」説では、さらにこの上に「献嘉」の二字が脱落していると考えられている。そこでその二字を補ってみると、「左大臣舍人正八位下牟佐村主相摸が嘉瓜（めでたい瓜）を献じた」の意となり、相摸が位二階を進められ純一〇疋・布二〇端を賜わる所迄が一続きの、献瑞記事となる。「嘉瓜」自体は、延喜治部省式の祥瑞一覧の中に見出すことが出来ない<sup>(2)</sup>ので、果たして先の記事を「献嘉瓜」とみて祥瑞記事として扱って良いものか疑問もあるが、五世紀後半に成立した『宋書』符瑞志下に七

例の「嘉瓜」と一例の「嘉瓜」に準ずるとみられる奇妙な瓜の例がみられること、<sup>(3)</sup>『統日本紀』和銅六年正月戊辰条に伯耆国が「嘉瓜」を献じたという記事があること等から、「嘉瓜」という言葉が存在したということは認めることが出来ると思われる。また、延喜治部省式の祥瑞一覧にはないが、正史に祥瑞として記録されているものの例もある<sup>(4)</sup>。そして、後者「依」説ではこの字を補ってみても依然本条の文意は不明であることを考えみると、私は「辰」は「瓜」と読む方が良いように思う。

そこで本論文では、「辰」は「瓜」と読み本条全体で献瑞記事を構成しているものとみなすことにして、それでは延喜式に規定のない「嘉瓜」は、祥瑞としてどの等級に位置するのかということについて、相摸が得た位階二階の昇叙・純一〇疋・布二〇端という賜祿の内容から考察してみたい。

### 一、瑞の等級ごとの賜祿内容

本稿の目的は「嘉瓜」の祥瑞としての等級を知ることにあるが、この手がかりとしてまず考えられるのは、相摸の得た位階や賜祿の内容であ

る。そこで、延喜治部省式によって等級を知ることが出来、かつそれに対する賜禄内容が明らかである祥瑞の事例を集め、それらの中に、相摸が得た位階二階の昇叙・純一〇疋・布二〇端と似通った賜禄内容である祥瑞の事例がないか、あるとすればその祥瑞の等級は何か、ということ調べてみようと思う。

さて、祥瑞のサンプルをどこから集めるかという問題があるが、祥瑞記事は現実の政治過程を反映しており、正史の編纂段階における扱い方がそれぞれに異っている<sup>⑩</sup>ので、あまり広範囲に互ってサンプルを求めているも無意味と思われる。そこで、『続日本紀』に表れる祥瑞記事に限って検討することとする。

サンプルの収集方法については、『続日本紀索引』の「瑞」の項<sup>⑪</sup>を参照し、その中から

②祥瑞としての等級を延喜治部省式によって知ることが出来る。

③特定の人物が賜禄を受けている（但し僧は除いた）。

④賜禄の内容が具体的である。

という以上三点の条件を満たすものを採用した。

この方法で得られたサンプルを表にまとめたものを以下に示す（表①参照）。

また、ここで表①の見方を説明しておく。

②祥瑞は等級ごとに大別し、瑞種ごとに小別して並べた。

③人名は「捕えた（得た）人」を(T)、「献上した人」を(K)と区別した。

④賜禄内容は、相摸が賜わった位階と純・布（単位はそれぞれ疋・端）に注目し、それ以外のものはその他として記した。

表① 賜禄内容一覧

中										上	大										等級
白雀	白雀	白雉	白雉	白鳥	白鳥	白鳩	白鳩	白鳩	白鳩	赤鳥	白鹿	黒狐	白亀	白亀	白亀	白亀	白亀	白亀	白亀	白亀	瑞種
(T)凡	(K)弓削御清朝臣清人	(T)財部宇代	(K)飛鳥部吉志五百国	(T)文部龍麻呂	(K)長谷部文選	(K)猪名部文麻呂	(K)河辺朝臣乙麻呂	(T)大養広麻呂	(T)大養広麻呂	(T)穴人臣国持	(K)笠朝臣雄宗	(K)不	(K)高家分部福那理吉	(T)山奉公広主	(K)大刑伴部広瀬	(T)尾張子虫	(T)賀茂	(T)賀茂	(T)賀茂	(T)賀茂	人
直大成	位二階	爵二級	從八下	爵二級	少初上	爵二級	爵二級	爵二級	爵二級	從八下	位二階	明	爵一六級	爵一六級	從八下	從五下	從六上	從六上	從六上	從六上	名
一	一	一	一〇	一	一	一	五	一	一	二〇	一	一	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇	二〇	二〇	二〇	賜
一	一	一	四〇	一	一	一	二〇	一	一	五〇	一	一	三〇	四〇	三〇	一	一〇	一〇	一〇	一〇	純
稲一〇〇〇東	稲一〇〇〇東	稲五〇〇東	綿二〇〇疋・正税一〇〇〇東	稲五〇〇東	正税五〇〇東	当国の稲五〇〇東	糸一〇〇約・鑿二〇口	戸に復三年	綿・歟を賜う	綿三〇〇疋・稲二〇〇〇東	戸に復三年	綿二〇〇疋	綿二〇〇疋・正税一〇〇〇東	綿二〇〇疋・正税一〇〇〇東	綿二〇〇疋・正税一〇〇〇東	綿二〇〇疋・正税一〇〇〇東	綿四〇〇疋・大税二〇〇〇東	綿四〇〇疋・稲二〇〇〇東	綿四〇〇疋・稲二〇〇〇東	綿四〇〇疋・稲二〇〇〇東	布
延暦十七・三三	宝龜元・五十一	宝龜元・七十六	景雲二・六十一	宝龜元・七十六	神護二・九十一	神護二・五十六	慶雲三・五十六	文武三・三十九	慶雲二・九十六	宝龜元・五十一	和銅五・九十三	宝龜三・三十一	宝龜元・十九	神護二・九十一	神護二・九十一	天平六・三七	天平六・三七	天平六・三七	天平六・三七	天平六・三七	内
五五五	三七六	三七八	三五五	三七八	三五八	三六四	二六	四	二二	三七六	四九	四〇六	三八五	三五八	三五八	一八五	一一八	九七	六三	六三	容
																					他
																					年
																					月
																					日
																					頁

②年月日は賜禄が行われた日を示す。

③頁は新訂増補国史大系本の『続日本紀』の頁を示す。

この表①を見る限り、祥瑞の等級ごとの賜禄内容の統一性というものは、あまりはつきりしていないように思われる。<sup>⑫</sup>例えば大瑞についてみると、賜禄内容は、およそ位階・絁・布・(正税) 稻・綿が共通している。しかし、宝龜三年十月十一日に白亀を献じた家部嶋吉と高分部福那理の二人は、昇叙がなく賜禄の品目・量も少ない等、他の白亀献上者と比較して明らかに扱いが低い。また、同じく大瑞に分類されているが、神馬献上者の賜禄内容は白亀献上者のそれよりも劣っている。さらに、慶雲元年五月十日同日に行われた慶雲発見者と神馬献上者に対する賜禄においては、瑞種が異なっているのに賜禄内容はほとんど同じであり、瑞種より同日付で賜禄が行われたということが、賜禄内容を決定する際に作用したと思われる。以上のように、瑞種ごとの賜禄内容の統一性も必ずしもあるわけではない。

しかし、『令義解』儀制令8祥瑞条<sup>⑬</sup>や延喜治部省式その他に賜禄方法の規定といったものが存在しない以上、実例によって推定していくより手段がないので、先の表もある程度手がかりになるだろう。以下、位階の昇叙、絁・布の支給の順に検討していく。

## 二、位階の昇叙について

表①をみると、位階は「位三階(を進める)」等と記されているものと「従八(位)下(を授ける)」等と記されているものがあり、『続

表②  
昇叙一覧

等級	人 名	昇叙の様子	昇叙階数	備 考
大	小野朝臣馬養	従七上→従六下	三階	無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか
	猪名真人石前	正五下→正五上	一階	
	不 明		三階	
	養徳馬飼連乙麻呂	従八上→従六下	五階	
	刑部広瀬女	無位→従八下	五階	
	大伴人益	無位→従八下	五階	
	高田首久比麻呂	大初下→従六上	一一階	
	紀朝臣家	無位→従六上	一四階	
	賀茂子虫	無位→従六上	一四階	
	尾 張 王	無位→従五下	一七階	
	山 稻 王	無位→正六上	一六階	
	日奉公広主女	無位→正六上	一六階	
	家部嶋吉			
	高分部福那理			
上	不 明			不 明
	笠朝臣雄宗	従六上→従五下	二階	
中	穴人臣国持	不明→従八下		無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか 無位のままか
	犬養広麻呂			
	河辺朝臣乙麻呂	無位→少初上	二階	
	猪名部文麻呂	無位→少初上	二階	
	長谷部文選	無位→少初上	二階	
	丈部龍麻呂	無位→少初上	二階	
	占部小足	無位→少初上	二階	
	飛鳥部吉志五百	無位→従八下	五階	
	財部宇代	無位→少初上	二階	
	弓削御清朝臣清人	無位→少初上	二階	
	凡直大成	従二位→正二位	二階	

日本紀』の表記に統一性がない。そこで、まずその人物のそれまでの位階を調べ、何位から何位へ何階上がったのかで表し直すことにする。その際、記事中に「某国某郡の人」と登場する人物の位階は無位と考えた（表②参照）。

以上の作業によって明らかになった、位階についての等級ごとの特徴をまとめてみる。

まず大瑞についてみると、昇叙の程度は一階から一七階までであり、昇叙の階数には共通点はみられない。むしろ、六位辺りになるように昇叙しているように思われる。

次に上瑞についてだが、昇叙の事例が一件しかないので明言出来ない。ただ、この唯一昇叙が明らかである笠朝臣雄宗の場合が、相摸と同じく二階昇っているという事実<sup>14</sup>に留意しておくことにする。

そして中瑞についてであるが、飛鳥部吉志五百国の場合を除くと、昇叙が明らかな人物の全てが二階昇っており、相摸の昇叙階数と合致している。

最後に下瑞について推定しておく、中瑞の場合の「前階プラス二階」より軽い「前階プラス一階」の昇叙であったか、或いは位階の昇叙ということはなされず、物品だけが下賜されたということが考えられると思う。

よって、位階の昇叙から考えると、「嘉瓜」の祥瑞としての等級は中瑞である可能性が高いように思われる。

### 三、絁・布について

先の表①をみると、賜禄内容に絁・布をよく含んでいるものとして大瑞があげられる。しかし大瑞の場合、その支給量を考えると、絁はともかくとしても、布は相摸の場合の二〇端と比較するとその一・五〇四倍も支給されており、量に差があり過ぎる。その上、その他として綿・（正税）稲・糸・歛等の品もみられ、総合支給量の差が歴然としている。よって、「嘉瓜」の祥瑞としての等級を大瑞とみなす余地はないように思う。

次に上瑞の例をみると、三例の内二例で絁・布が下賜されているので、量を不問とすれば賜禄内容は相摸の場合と通じるものがある<sup>15</sup>。しかし、その他の品もみられること、サンプルが不十分なため特徴を必ずしも明確に出来ないこと等を考えると、「嘉瓜」の等級としての可能性はあるものの保留とせざるを得ない。

そして中瑞の例をみると、賜禄内容に絁・布が含まれているものはわずかに二例しかない。その二例についても、他に糸・釜・綿・（正税）稲等が支給されていることを考えると、総合支給量が相摸の場合と比較して、多少多くなっているように思える。また賜禄品目は、絁・布よりむしろ（正税）稲を中心に構成されていると云える。

最後に下瑞について推定しておくが、大瑞から中瑞迄の流れでみると、絁・布が支給されることはないように思う。或いは、絁・布を賜禄品の中心的構成品目とすることで、他の等級の祥瑞の賜禄内容との違

いを特徴づけたということも考えられなくはない。が、『続日本紀』に表れた下瑞の例は嘉禾や木連理であるので、それに縁のある品という理由で稲や歛等が下賜されたと考えた方が、自然であろう。

よって、純・布の支給のみから考えると、「嘉瓜」の祥瑞としての等級は上瑞である可能性がある、という程度のことしか云えない。

#### 四、中瑞の賜禄について

前章迄の検討から明らかになったことを確認しておく、「嘉瓜」の祥瑞としての等級は、位階の昇叙から考えると中瑞であり、支給品目から考えると上瑞である可能性があるということである。また、位階が六位辺りになるように上げられていて、賜禄品の種類が多様で支給量も多過ぎる大瑞は、「嘉瓜」の等級の検討対象と成り得ないということも明らかである。

結局のところ、「嘉瓜」の祥瑞としての等級である可能性が幾分高いのは、位階の昇叙の程度が相摸の場合に合致した中瑞の方であると考えられる。しかし中瑞の事例は、その賜禄品が（正税）稲を中心として構成されているように見受けられるため、相摸が賜わった純一〇疋・布二〇端と、その支給量を直接比較出来ないという問題がある。

そこで本章では、中瑞のサンプルの賜禄品と相摸の賜禄品のそれぞれの総合支給量を、直接比較することが出来る物品に換算し比較するという方法によって、双方に共通点が見出せないか検討していく。中瑞のサンプルの中で検討の対象とするのは、位階が二階昇叙となっていること

がわかる人物に限ることにするが、その内の飛鳥部吉志五百国の例については、賜禄内容が他のサンプルに比べて抜きん出て多すぎるため除外し、残った六例を検討対象とする。

#### （一）

では相摸の賜禄品の総合支給量を、中瑞のサンプルの賜禄品の主たる構成品目である稲に換算し、互いを比較してみよう。

相摸の賜禄品を稲に換算するにあたっては、延喜主税式の禄物価法条を基準に用いたい。この禄物価法とは、「諸国において禄物の代米を支給することを前提として、国別に、また品種別に定められた公定価格」である。周知の通り、延喜式が成立したのは十世紀のことであるから、相摸が賜禄を受けた時代とは二世紀の隔たりがある訳だが、この条文の成立はいつかということ考えた場合、『日本三代実録』貞観八年五月九日条<sup>19</sup>によってこの条文の祖法となるべきものがそれ以前に存在していたことがわかるので、九世紀半ば頃迄には成立していたと云えよう。またこの条文の眼目は、原則として京庫（大蔵）より調庸物の内の布絹類を以て支給されるべき位禄・季禄・時服が諸国において支給されること、調庸物に代わってその料米を以て支給されることの以上の二点にある。これについて早川庄八氏は、まず京進すべき調庸物を現地において割り留めて支給した段階があり、それが調庸物に代わってその料米（または穀）を以て支給した段階へと移行するという過程を経ていることを指摘しておられる。前者の段階は、『続日本紀』神龜五年四月十五日条<sup>20</sup>の、諸国の国司らが調庸運搬の労を省くために、外位の官人の位禄は京に運送するものの一部を留め置き便宜を図ってその地の官人に給与することと

するよう要望したという記事にみられる。また後者の段階については、『類聚三代格』天平神護三年正月二十八日勅<sup>(21)</sup>によって、これ以前に諸国司の位祿は任国において支給されることになっていたこと、その場合の支給物は絁・布の類ではなく正税からの料米であったことがわかる。以上のことから早川氏は、「延喜年間に成立した年料別納租穀の制は従来の慣行を定制度化したものにすぎない」と述べておられる<sup>(22)</sup>。この慣行がいつ迄さかのぼり得るのか、仮に八世紀初頭迄さかのぼれたとして、その頃に基準となる公定価格が定められていたとしても、それと延喜主税式祿物価法条とがどのような関係にあったのかという問題がある。しかし、そもそも祿物価法自体が「時価の変動を無視して定められた標準価格であった<sup>(23)</sup>」ことを考えると、以上のような問題点があるということに留意しひとつの目安としてこの条文を換算基準に用いることは許されるのではないかと考える。以下、実際に換算し比較してみよう。

まず、どの国の公定価格を用いるかだが、相摸の職が「左大臣舍人」で在京官人に仕える身分であること、相摸自身は本条にしか登場しない人物であるので出身は不明だが、牟佐村主氏は『新選姓氏録の研究<sup>(24)</sup>』によると左京諸藩に分類されており、京近辺を本拠にしていたと考えられることなどから、畿内の公定価格を適用してよいと思う。次に、延喜主税式祿物価法条は、絹・糸・綿・調布・庸布・鉄の七種に品目を分けているが、今、換算基準として必要なのは絁と布である。布には調布の価法を用いるとしても、絁に絹の価法を用いてよいかという問題があるが、賦役令1調絹絁条<sup>(25)</sup>において絹と絁はともに等価とされていることから概ね同じ価値をもっていたと考え、絁には絹の価法を用いることに

する。そこで、畿内の価法では絹は一疋が稻三〇束、調布は一端が一五束と定められているので、これで相摸の賜祿品を換算すると絁一〇疋で三〇〇束、布二〇端で三〇〇束、合計して六〇〇束分の支給であったことがわかる。中瑞のサンプルの賜祿品は五〇〇〜一〇〇〇束であるが、主流は五〇〇束であるので、両者を比較するとほぼ同量の支給と云えよう。

次に、相摸の記事の年代と中瑞のサンプルとして取り上げた事例の年代とに出来るだけ近い時代の絁・布・稲の単価を実勢価格で求め、それぞれの賜祿品をそれに換算することで、総合支給量がどのような関係にあるのか考えてみる。「出来るだけ近い時代」の単価を基準に考えるのであるから、現実の物価の変動には即さないだろうが、これも一応の目安として捉えることは出来ると思う。

基準とする単価であるが、『大日本古文書(編年文書)』と『続日本紀』に史料を求めた<sup>(26)</sup>。相摸の場合は和銅三年に賜祿をうけているが、これに近い年代の物価を知る史料が乏しいので少し年代は離れるが、天平〜天平勝宝年間の物価を基準にすることにする。中瑞のサンプルの内の検討対象とする六例の場合は、『続日本紀』掲載年代が神護景雲年間と宝龜年間、そして延暦年間に分けられる。この年代に出来る限り近い時代の物価として、神護景雲年間と宝龜年間については天平宝字年間ものを、延暦年間については宝龜年間ものをそれぞれの基準に採用した(表③―1参照)。

では、それぞれの賜祿品の錢に換算した総額をみていこう。まず相摸の場合だが、絁一疋は約二四〇文、布一端は約二〇〇文に換算されるの

表③—1 換算基準価格一覽

延暦10年 (791)	神護景雲2・3年と宝龜元年 (768)・(769)・(770)				和銅3 (710)			年 対照
米	米	綿	布	纈	稲	布	纈	品目
宝龜二年 (七七二)	天平宝字八年 (七六四)	天平宝字七年 (七六三)	天平宝字六年 (七六二)	天平宝字六年 (七六二)	天平勝宝三年 (七五三)	天平三十八 (七三八)	天平十八年 (七六四)	年代
六 升Ⅱ三九文	一 石Ⅱ一、〇〇〇文	一六、 Ⅱ一、〇四〇屯、 四六八文	四 端Ⅱ一、四二〇文	三七二 足Ⅱ二、一八〇文 一〇 正Ⅱ七、三五〇文 二 足Ⅱ一、二三八〇文	六 升Ⅱ三〇文	二〇端Ⅱ四、〇〇〇文	二 疋Ⅱ四八〇文	物
「大日本古文書」 六卷ノ二六頁	「続日本紀」 (大系本)三三頁	「右 一六卷ノ三七頁 同」	「右 五卷ノ一四五頁 同」	「右 五卷ノ三八頁 同」	「右 二卷ノ一八〇頁 同」	「右 七卷ノ一四六頁 同」	「大日本古文書」 二卷ノ五六〇頁	出典
一束Ⅱ六・五文	一束Ⅱ一〇文	一屯Ⅱ六四文	一端Ⅱ三五五文	平均して 一疋Ⅱ九四〇文	一束Ⅱ五文	一端Ⅱ二〇〇文	一疋Ⅱ二四〇文	単価

で、純一〇足で約二四〇〇文、布二〇端で約四〇〇〇文、合計約六四〇〇文に相当する賜禄が成されたと考えられる。次に中瑞の六例のサンプルの場合だが、神護景雲年間と宝龜年間の稲一束は約一〇文、延暦年間の稲一束は約六・五文と考え換算すると、神護景雲年間と宝龜年間の賜禄は約五〇〇〇〜一〇〇〇〇文、延暦年間の賜禄は約六五〇〇文に相当するとみられる(表③—2参照)。傾向から云つておよそ五〇〇〇文程度の賜禄が中心であつたと思われる。そこで、相摸と中瑞の六例のサンプルとの賜禄品の総額を比較してみると、相摸が約六四〇〇文であり中瑞の六例のサンプルの傾向が約五〇〇〇文であるから、比較的近い値を示しているように思われる。従つてそれぞれの賜禄品は、総額という観点から考えると近しい関係にあると云えよう。このように相摸の賜禄品

表③—2 賜禄稻の基準価格による換算一覽

人 名	賜祿(正稅稻(束)	錢に換算(文)	年
猪名部文麻呂	五〇〇〇	五、〇〇〇	神護景雲三
長谷部文選	五〇〇〇	五、〇〇〇	神護景雲二
文部龍麻呂	五〇〇〇	五、〇〇〇	宝龜元
占部小足	五〇〇〇	五、〇〇〇	宝龜元
財部宇代	五〇〇〇	五、〇〇〇	宝龜元
弓削御清朝臣清人	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	宝龜元
凡直大成	一、〇〇〇	六、五〇〇	延暦十

と中瑞のサンプルの賜禄品との間には、総合支給量が近いという共通点  
が認められる。

(□)

ここで、支給品目から考えた場合に「嘉瓜」の祥瑞としての等級である可能性があった、上瑞の賜禄品の総合支給量と相摸の賜禄品の総合支給量との関係を考えてみよう。上瑞のサンプルの中で、賜禄内容が具体的に唯一の事例の笠朝臣雄の賜禄品を錢に換算して総額を求め、それと相摸の賜禄品の総額とを比較する。

雄宗の場合は宝龜元年に賜祿を受けているので、この年代に出来るだけ近い時代の物価として、(イ)で中瑞のサンプルの内の神護景雲年間と宝龜年間の物価の基準として採用したのと同様に、天平宝字年間の物価を基準としてみていくことが出来る。そこで雄宗の賜祿品の場合だが、  
 純一疋は約九四〇文、布一端は約三五五文、綿一屯は約六四文、そして稻一束は約一〇文に換算されるので、純二〇疋で約一八八〇〇文、布五

○端で約一七七五〇文、綿三〇屯で約一九二〇文、稻二〇〇〇束で約二〇〇〇〇文、合計すると約五八四七〇文に相当する賜禄が成されたと考えられる。これを相摸の賜禄品の総額と比較してみると、九倍もの賜禄が成されたことになる。上瑞のサンプルの内、賜禄内容が明らかであるのは雄宗のわずか一例のみであるから明確なことを云うことは出来ないのだが、相摸の賜禄品の総額と雄宗のそれとの間にこれ程の差があるということは、上瑞を「嘉瓜」の祥瑞としての等級と考えるのは無理ではなからうか。

位階の昇叙の程度が相摸の場合に合致したことで、「嘉瓜」の祥瑞としての等級である可能性が上瑞よりは幾分高からうと考えた中瑞の方が、賜禄品の総額という面をみても相摸のそれと近い値を示したことで、一層「嘉瓜」の祥瑞としての等級である可能性が高まったように思う。

#### (八)

延喜主税式禄物価法条を換算基準として採用してよいか問題が残るし、また、古代の銭の価値も現代とは異なり変動が激しかったであろうから、単に近い時代の物価を使用し換算しても現実にはそぐわないかもしれないので、今迄の比較はあくまでひとつの目安として捉えるしか出来ない。さらに、中瑞のサンプルの事例の賜禄品目が相摸の場合のそれと異なっているという問題も残っているが、これについては、銭の価値が変動したであろうことと同様に純・布・稻の価値も変動したであろうから、相摸の時代には純・布をもって賜禄としたが、純・布を支給するということと何らかの不都合が生じたか、或いは（正税）稻の有用性が認められなかったために、後の時代の中瑞の賜禄品は（正税）稻を中心に構成さ

れるようになったのではないかと考える。前述したような、禄が絹布類の調庸物ではなくその料米によって支払われるようになり、それが慣行化していったということを考慮するとその可能性は高いように思われる。よって相摸と中瑞のサンプルとのそれぞれの賜禄について、総合支給量が近く、品目は時代の変化に伴い変更された可能性があるという関係が見出せると思う。

以上の検討と考察から、私は「嘉瓜」の祥瑞としての等級を中瑞とみなして良いと考えるのである。

#### おわりに

以上のように、延喜治部省式に表れないこの「嘉瓜」なるものは、中瑞に位置する祥瑞であるとみなして良いだろうという結論に至った。そこで、「厩」は「瓜」と読み、さらにこの上に「献嘉」の二字を補った新訂増補国史大系本の説は成り立ち得ると考える。

とすると、本条は全体でひとまとまりの献瑞記事を構成していることになるので、文武百官が賀辞を奏して賜禄を受けたのも、京裏の百姓が戸ごとに穀一斛を支給されたのも、相摸の「献嘉瓜」によるものとみなすのが自然である。よって、朝日本が「厩」「依」説を採用したがために、本条の「賀辞」について「新都を賀するなるべし」という註を施したのも誤りであると云えよう。



註

- (1) 『新訂増補国史大系』『続日本紀』、四四頁。
- (2) 右同、龜頭の校勘。
- (3) 朝日新聞社版『増補六国史』『続日本紀』、七九頁（以下、朝日本と略称する）。
- (4) 『新日本古典文学大系』一二『続日本紀』一、一六二頁（以下、岩波本と略称する）。
- (5) 『新訂増補国史大系』『延喜式』、五二七頁～五二八頁。
- (6) 漢章帝元和中、嘉瓜生郡國。  
漢安帝元初三年三月、東平陵有瓜異處共生、八瓜同蒂。  
漢桓帝建和二年七月、河東有嘉瓜、兩體共蒂。  
晉武帝太康三年六月、嘉瓜異體同蒂、生河南洛陽輔國大將軍王濟園。
- 晉武帝太康元年十二月戊子、嘉瓠生寧州、寧州刺史費統以聞。  
宋文帝元嘉二十五年四月戊辰、嘉瓠生京邑新園、園丞徐道興以獻。  
孝武帝大明五年五月、嘉瓜生建康蔣陵里、丹陽尹王僧朗以獻。  
明帝泰始二年八月戊午、嘉瓜生南豫州、南豫州刺史山陽王休祐以獻。
- 『宋書』三「符瑞志下」、八三三頁～八三四頁（梁沈約撰）。本稿での引用は、中華書局標点本による。
- (7) 岩波本の脚注に、右の内「漢章帝元和中、嘉瓜生郡國。」の一例が指摘されている。
- (8) 前掲(1)書、五一頁。
- (9) 阿部武彦「上代人と異常現象―祥瑞思想序考―」（『歴史地理』八一―、一九四三年）他を参照した。
- (10) 福原栄太郎「祥瑞考」（『ヒストリア』六五、一九七四年）。他に祥瑞については、東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」（『日本歴史』二五九、一九六九年）、関晃「律令国家と天命思想」（『東北大学日本文化研究所研究報告』一三、一九七七年）を参照した。
- (11) 「六国史索引」二『続日本紀索引』、三八四頁～三八五頁。
- (12) 表の製作にあたって、本文で説明した方法では下瑞のサンプルを得ることが出来なかったため、そもそも表として不完全であるということをお断りしておく。
- (13) 『新訂増補国史大系』『令義解』、二〇七頁。
- (14) 上瑞の事例の内、唯一位階の昇叙の程度が二階であったことがわかってゐる笠朝臣雄宗の賜禄内容に、絶・布が含まれているという点にも注目出来る。
- (15) 人物と賜禄内容が定かでないため、表①には掲載出来なかった。
- (16) 前掲(10) 福原論文において、彼が献じた祥瑞に対する勘当の方法は従来治部省が行っていた勘当方法と異なっていることが指摘されているので（二七頁）、例外として除外した。
- (17) 前掲(5)書、六六三頁～六六四頁。
- (18) 早川庄八「律令財政の構造とその変質」（『日本経済史大系』1古代、東京大学出版会、一九六五年）、二七〇頁。
- (19) 『新訂増補国史大系』『日本三代実録』一八二頁。
- (20) 前掲(1)書、一一二頁。

(21) 「新訂増補国史大系」『類聚三代格』、二五四頁。

(22) 前掲(18)書、二六八頁～二七一頁。

(23) 右同、二七〇頁。

(24) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文編(吉川弘文館、一九六二年)、二五八頁。

(25) 前掲(13)書、一一五頁。なお、同条の義解は絹と純を「細為<sub>レ</sub>絹也、麤為<sub>レ</sub>純也。」と説明しているので、実際の取り引きの際には純の方が値段が安かったかもしれない。

(26) 竹内理三『日本上代寺院經濟史の研究』(大岡山書店、一九三四年)所収の「上代物価表」を参考にした。

付記

本稿は、平成三年五月に弘前大学人文学部「国史学演習(『続日本紀』研究)」において発表したレジュメの一部をもとに、増補加筆したものである。成稿に至る迄御指導下さった、弘前大学人文学部小口雅史助教授に感謝の気持ちを捧げます。

(弘前大学人文学部学生)